

---

# 勘違い青年の海軍奮闘記

勘違い

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勘違い青年の海軍奮闘記

### 【Nコード】

N8326Z

### 【作者名】

勘違い

### 【あらすじ】

幼馴染を探して海軍に入隊し、スピード出世している見た目は少年の青年が居た。その青年の異名は「先読み」。でも本当は「勘違い」と「運の良さ」だけ。だけど世界から信頼されている、ちょっと不思議な物語。

## 第一話 海軍に入隊した理由（プロローグ）（前書き）

登録してから最初に出そうと思っていた小説です。  
でも書き直して、投稿しました。

（余談 完結済みと非公開中と連載を入れて11作品目です。）

## 第一話 海軍に入隊した理由（プロローグ）

「少将、革命軍が反乱をおこし至急北の海に出動せよと要請が。」

『…………南だ。』

「しよ、少将？…………ハッ、まさかっ！！」

バタバタ

「少将！ たった今連絡が！ 革命軍が南の海にて反乱を！！ 北の海の騒ぎは布石だったようです！」

『よし、行こう。』

「すごい…………革命軍の動きが嘘だと最初から分かっていたんだ……………」

これが海軍本部少将、“先読み”のツバサ」

翼 Side

元々僕が海軍に入隊志願した理由は……………」

幼馴染を探してだった。

なのに……

なのに……

居ないじゃんか！あの馬鹿、何処の部隊に居るんだよ！

翼 Side out

幼馴染 Side

翼がまだ6歳の時の頃。

「あ！ワッフル！」

「おれが買ってやるよ。自分のを取って来い。」

これは普通のワッフルではない。

当たりつきのワッフルで、物凄い確率で当たると言う。

何故そんなに物凄いのか。

このワッフルは有名で人気だったが、ある一人のオーナーがこう言った。

「記念に世界に出荷するワッフルの一つだけに宝石を入れましょう。」

それで、物凄い確率で当たる、一つだけ宝石入りのワッフルになったのだ。

「コレがいい。」

「よし。コレ下さい。」

「はいよ。」

「ほら。」

「ありがとう!」

「?」

「どうした。」

「おばちゃん!」

「どうしたの?」

「なんか入ってる。」

「え?」

「おいおい、嘘だろ……。」

ワツフルの中に入っていたのは……

「そりゃ、当たり前だよ! 凄いね、ツバサ君。」

当たり前宝石だった。

こいつの運の良さは世界一と言ってもいい。

「……うん。」

それから4年が経ち、俺らは野望を叶える為に出航することにした。

「ツバサ、お前も海賊にならないか?」

「え?……無理。」

ガクッ

「キャプテン大丈夫ですよ! 俺ら海賊だから!」

「そうだな。後で奪えば良いよな。」

「アイアイキャプテン！」

「ロー！僕、海軍に入って追いつくから！」

「誰が海軍だ！海賊って言ったはずだ！」

「海軍に入る！」

「もう良い。じゃあな！迎えに来るからな！」

〓現在〓

「キャプテン！ツバサの事が新聞に載ってるよ！」

バサツ

「あの馬鹿、何海軍に入ってたんだ！」

「凄いよ！この若さ（10代）で少将だよ！」

「海賊と海軍を間違ってたんじゃないの？」

「ペンギン、それは無いだろ。」

「キャプテン、ツバサならありえるよ！」

「そうだな。」

あの馬鹿<sup>ツバサ</sup>は海軍に入ってしまった、奪うことが出来なくなってしまった。  
ったく、なんでいつも、俺の願いを打ち砕きやがるんだ！

トラファルガー・ロー Side out

これは勘違い青年の海軍奮闘記。



**第一話 海軍に入隊した理由（プロローグ）（後書き）**

最初の報告の時、翼が考えている事は次回にて。

## 第二話 部下チヨ一怖い(前書き)

冬休み中とか、休日(何も無い、暇な日) (学生なので)には、この時間帯には一話ぐらいは投稿してます。(なんかの目標? 的な)

## 第二話 部下チヨ一怖い

翼 Side

僕の名前は翼<sup>ツバサ</sup>。海軍本部の少将をやってるよ。よろしく。

『（腹減ったな・・・何か甘い物が食べたいな。・・・そういえばこの間、雉がおいしいケーキ屋があるって言ってたな。どこの海って言ったつけ。え〜と・・・）』

「少将、革命軍が反乱を起こし至急北の海に出動せよと要請が。」

『・・・（あ！思い出した！）南だ。』

「少将？・・・ハッ、まさか！！」

バタバタ

「少将！たった今連絡が！革命軍が南の海にて反乱を！！北の海の騒ぎは布石だったようです！」

『（ちよつと位休んでも良いよな？）よし、行こう。』

「すごい・・・革命軍の動きが最初から嘘だと分かっていたんだ・・・」

これが海軍本部少将、“先読み”のツバサ」

『ん？あれ部下二人がこっち見てる。あれこいつらいつ来たんだ？はっ！？まさか抜け出そうとした事がバレた！？』

「す、すごい！流石先読みのツバサ」

「この人が居る限り海軍は安泰だ。」

部下は感動のまなざしを向けているのだった。

『めっちゃ睨まれてる！一緒に行くか。(こつなったら道ずれ作戦！！)』

「はい……」

そして俺の艦は南の海へ

「少将！俺一生貴方について行きます！」

『（何！？絶対にサボらせないという宣言なのか！？部下チヨー怖い）』ブルブル

寒気がしたから、準備運動でもしている。震えながら。

「少将？寒いんですか？此処は南の海ですよ？」

「どう見えても、準備運動だろ。」

「ハッ、まさか……少将も戦闘に!？」

『（え？銭湯？）え、あ、うん。久しぶりだな。』

「久しぶりに少将の見たいです！」

「俺も！」

「俺も！」

『（なっ！部下ってこんなにエロかったっけ？）まあ。わかった。』

「本当ですか!？」

『ああ。（何、返事してんだああああ！！僕はああ！！）』

何故か、部下の頼みには少し弱い翼であった。

そして、革命軍を摘発して軍艦で翌日に海軍本部に戻った。

その朝の新聞を部下が食堂で読んでいた。

その日の新聞の見出し

先読みのツバサ少将！革命軍を一網打尽に！！

海軍本部所属のツバサ少将が南の海にて革命軍を一斉摘発。関係者の話によるとツバサ少将は最初に起きた北の海の騒動が起きた時も冷静で一言「南だ」と呟いたそうだ。少将が呟いた通りに南の海で革命軍が動き出した。

少将はその知らせを聞いたと同時に配下の海兵と一緒に南の海へ。

少将の素早い指示のおかげで革命軍の動きは封じられた。

海軍本部の時代を担う戦力か？

ツバサ少将の活躍には今後も目が離せない。

「だつてぞ。」

「少将凄いなもんな。」

『(何!?!やっぱり、サボろうとした事が!?!)』

翼 Side out

部下が感動してるのに、一人だけ勘違いしている翼だった……。

第二話 部下チヨ一怖い（後書き）

ナレータ役の作者も呆れてます。

戦闘を銭湯と間違えたのは作者の実話ですが・・・。

（雉は青雉のことです。わざとです。）



**第三話 なんで居たの？（前書き）**

**【速報！】**

第四話、11時から13時の間に更新予定。

### 第三話　なんで居たの？

翼　Side

海軍本部にある僕の職務室に帰ると・・・

「あ、おかえりツバサ君。」

『なんで飛べない雉が。これは、何かのドッキリ？』

「違うよ！もう。」

海軍本部大将の（青）雉が居た。

『雉って飛べないよね？』

「え？どうしたの！？」

『いやー。だって、雉って言うじゃん。』

「おれは雉じゃないよ！ただの異名。あ、ツバサ君は雉って言うてるけど、本当は青雉だよ。」

『興味無い。』

「むづ。……………ん？それ宝石？」

『これは思い出の品さ。幼馴染と一緒に食べた時、ワッフルから出

てきた当たり。』

「あゝあの当たりつきワツフル？ツバサ君が当たりを引いたんだね。」

「

『まあ。』

「あれ、物凄い確率だよ。」

『え？そんなに凄いんだ。（僕、普通に取っただけなんだけど。）』

「うん。」

『雉！』

「何？」

『後ろに人だかりがー！』

人だかりって言うても3人だけど。しかも、全員、僕の部下。

「え？」

「少将、当たったんですか！？」

「凄いです！」

「さすが少将！」

「ねえ。」

「……!? 大将殿!?!」

「何しに来たの?」

「あ、伝言です。」

『伝言?(まさか、仕事関係じゃあ無いよな……)』

「大将、仕事をサボらないで下さい!」

「と、言う伝言。」

「はあ。分かった分かった。行くから。」

「大将が部屋に戻るまでお供します!」

「ええ!? 俺、そこまで信用無し?」

「……はい。」

「ツバサ君まで!?!」

『(だって抜け出そうとも、その時には部下が居るもん。)(』

「分かったから!もう!」

足早に雉が戻っていった。

てか、何で居たの？

ま、いいや。

それより……………

『……………本当に何処に居るんだろっローは……………』

翼 Side out

くオマケく

〓海軍本部〓

『もしかしてローの奴、海賊になってたりして！まあ、あの極悪人面ならありえるか。あはははは！！』

〓海賊船（潜水艦）〓

『ギャアアアアア！キャプテン新聞の写真のツバサにメスぶつ  
刺した！！』

『何してるのキャプテン！？』

『今こいつが俺の悪口を言ったよつな気がした。』

『ええええええええええ！？』

### 第三話 なんで居たの？（後書き）

もしかして、ローとか好きな人、読者の皆さんの中に居ましたか？

居たら、謝っておきます。

ローをこんな風にして、ごめんなさい。

でも、後々会いますから。

あ、感想待ってます。

#### 第四話 白くまのぬいぐるみ（前書き）

13時って書いてあるけど、13時59分までって事です。

ある人からある人のような白くまのぬいぐるみを貰います（届けに来てくれた）。

さて誰でしょう？

答えは下です。

（今回はいつもより長めです。）



## 第四話 白くまのぬいぐるみ

『今日は何人来るんだろう?』

「まあ、どいつも気まぐれな者ばかりだからな、予想はつかん。」

『でも、僕、絶対にあの桃色鳥は来ると思うよ。』

「桃色鳥?」

『……………ドフラミンゴ。』

「ああ……………確かに桃色鳥だな。』

兵士 Side

俺は最近ツバサ少将の下についた新人海兵。

ツバサ少将は俺達新人海兵の間でも話題の人である。

若くして海軍本部少将の地位に昇りつめ上層部達からの信頼も厚い将来を担う海兵。

そして異名である 先読みのツバサ。悪魔の実の能力と言う訳でもないのに彼は未来に何が起きるか予測出来るのだ。

つい先日も少将が未来を見通し革命軍の攻撃を最小限に抑える事が

出来た。

しかし、彼はその力を自慢するわけでもなく、ただ静かにいつも虚空を眺めている。

まるで来るべき悲劇を知りながら祈る事しか出来ぬ悲運の乙女のようだ、少年だけど、と皆は言う。

まさにその通りだ。

少将は普段は明るく気さくな方ではあるが時々とても悲しそうな顔をなさっている。

とても儂げな様からはとても海軍本部少将とは思えない。

一体この少年は何を背負ってそんな顔をするのだろうか。

少しでも彼の憂いを取り除く力になりたい！

少将の下に集う海兵は皆そう思い、少将の力になるように日々尽力している。

もちろん、俺もその一人だ。

コンコンッ

「少将、いらっしやいますか？」

『いるよ。入って良いよ。』

「失礼します……………つて、た、鷹の目!？」

「な・・・なんで、鷹の目が・・・」

『暇つぶしらしいよ。な！ミホーク！』

「翼、お茶が無くなった。」

『ほい。』

驚いた・・・少将の部屋の扉を開けるとそこには王下七武海の一人、鷹の目ことジュラキュール・ミホークが居た。

少将は鷹の目とまるで久しぶりに会った友人のように接している。

すごい・・・。

俺なんて、あの目を見るだけですくんでしまうのにツバサ少将は・・・

やっぱり、この人すごい！

兵士 Side out

「随分と下の者に尊敬されているんだな。」

『そうか？僕は逆に若いくせに何で少将なんだよって、いついじめられるかヒヤヒヤしてるんだけど。』

「ふっ、主に限ってそれはないだろう。」

もうすぐ七武海の召集があり、おれは少し早く海軍本部に足を運んだ。

理由は二つ。

一つはおれが暇だったから。

もう一つはこいつ、翼に会つためだ。

翼と出会ったのは、まだ翼が新米海兵であった時だった。

翼はおれを含む七武海を目の前にしても臆することなくおれ達にくっついてかかってきた。

新米でありながら己の意志を貫き通すその強さに惹かれたのはおれだけではないだろう。

今では翼はつる大参謀と共に七武海の相手をするようになり、こうして顔を合わせる回数が多くなった。

あの男嫌いな海賊女帝、ボア・ハンコックでさえ、自国の入国の許可しているのだ。

翼は今では海軍には欠かせない逸材となっている。

『ミホーク、本当にありがとう！ちょっと仕事が忙しくて買いに行けなくてさ。』

「主の頼みだ、断る訳が無い。だが、主もやはりまだ子供だな、そのようなもので遊ぶとは。」

おれが少し早く来た理由。

それは翼に頼まれたものを届けるためだった。

それは・・・・・・・・・・

『そつだよー子供だよー良いじゃん！可愛いじゃん、この白熊のぬいぐるみ』

白くまのぬいぐるみ

『オーダーメイドなんだけど、どうしても取りに行けなくて……本当に助かったよ。』

「まあ、良い暇つぶしにはなった。しかしそのようなもの別にオーダーメイドにせずとも、そこら辺の雑貨店に行けば買えるだろ。」

『駄目だよ！白くまは白くまでもこの顔じゃないとダメなんだよ！』

「（このように嬉しそうに、やはりまだまだ子供だな。）まあ、大事にする。」

海軍少将とはいえまだ幼さを残す少年。

この少年に笑顔を与えられるのならばおれは喜んで力を貸そう。

ミホーク Side out

くオマケく

『どうしたの？ミホーク。なんか笑ってない？』

「いや、別に気にするな。」

「フッフッフッフ、ツバサいるか？」

『あ、やっぱり桃色鳥来た。』

「五月蠅いのが来た。」

「お前が白くまのぬいぐるみを探していると聞いてな。おれからのプレゼントだ受け取れ！」

『でかつ！？本物よりでか！？』

「オマケのオマケとある日の新聞。」

最近流行の白くまのぬいぐるみ。

このぬいぐるみは今話題の海軍少将が特注で注文したものらしい。噂を聞きつけツバサ少将が注文したこの白くまのぬいぐるみの注文が殺到している。

今は通販も受付中。

.....。

「.....この白くま、どう見てもベポだろ。」

「お、おれが大量に新聞に載ってる。」

「キモツ！大量のべポ、キモツ！！」

「この白くまのぬいぐるみ一つ注文したいんだが。」

「キャプテン！！？なに注文してるの！？注文しなくても此処には本物があるって！！」

白熊へポのぬいぐるみ、只今、世界で流行中。



#### 第四話 白くまのぬいぐるみ（後書き）

はい。答えは鷹の目です。

桃色鳥はおまけ的です・・・。

|||||

あと訂正します。

投稿時間帯が広くなりました。

大体10時～18時です。（ピーク?とかは昼です。アバウトだけ  
ど・・・）

## 第五話 遭難（前書き）

### 【速報】

今日は2話以上（2話で終わるかもしれないけど）更新予定。  
コレを投稿したら次回を書き始めてます。

## 第五話 遭難

グランド  
ライン  
偉大なる航路のとある地域で僕は部下に連れられ軍艦でパトロール  
をしていた。

そんな時突然、嵐に遭い僕は海に投げ落とされた。

雉  
Side

その知らせは突然だった。

「大変です！ツバサ少将が海に落ち、遭難されました。」

おれは他の大将、ボルサリーノとサカズキとセンゴク元帥と会議中  
だった。

そんな時、一人の海兵が知らせを持って来た。

ツバサ君の遭難

「な……一体あいつに何があった!？」

センゴクさんも珍しく取り乱す。

そりゃそうだろう。

ツバサ君は海軍に入ってから一度も問題を起こした事が無く、優秀な海兵だ。

そんなツバサ君が海に落ちるミスをするとは思えない。

「それが……………」

ツバサ少将の船が嵐に遭い、一人の海兵が海に落ちそうになったのを少将が助け、代わりに少将が海に……………」

雉 Side out

兵士 Side

「おい！大丈夫か！？」

「つく……………駄目だ……………手がもう……………」

迂闊だった、軍艦の甲板に居た俺は突然の突風に耐え切れず吹き飛ばされそうになってしまった。

なんとか船の縁にに捕まったがこの嵐で船は揺れに揺れ、今にも俺を振り落としそうな勢いだ。

仲間が必死に俺を引き上げようとするが、もう限界だ。

このまま、海に落ちてしまうのか……………」

「なっ！！少将！？」

『どいてー！』

仲間の驚きの声と共に現れたのは、我らが愛してやまないツバサ少将。

ツバサ少将は切羽詰った顔でこちらに走ってくる。

突然の事で俺も驚いていたら少将は俺の腕を掴み落ちてくる。

「しよ、少将！？」

『しゃべるな』

「！！！？？」

少将は海に落下していく中、勢いよく俺を上へと振り上げた。

そのおかげで俺は甲板に……………

しかし、ツバサ少将は……………

「少将……………」

「お、おいお前大丈夫か！？」

「俺よりもツバサ少将が海に……!!」

「ツバサ少将……お前を助ける為に……」

「そんな……」

そんなツバサ少将……!!!!」

兵士 side out

雉 Side

「…あのお人よしが……」

なんともツバサ君らしい理由だ。

ツバサ君はいつでも自分より他人を優先する。  
本当に正義の魂のような子だ。

「センゴクさん、わっしが行きましょう。ツバサ君は能力者じゃないけど心配だ。」

「待て、ボルサリーノ。わしが行こう。」

珍しい。あのサカズキが他人のために動くなんて。

それだけツバサ君が愛されてるってことなんだろうけど。

ミシッ

うん？今、扉が嫌な音を。

バキッ

ズサアアアア

「……「!?」……」

扉を破ってきたのは、残りの上層部の海兵だけではなく、将校達も居る、沢山の人、人、人、人。

「私が行くよ。」

「いや、俺だ。」

「俺だ！」

本当にみんなに愛されてるツバサ君。

「俺が行くよ。」

助けに行く権利は渡さないよ。

「はあ。何も将校全員が行かなくても仕方ないだろう。青雫、お前が行け。必ず、ツバサを助ける。」

「はい！」

雉 Side out

翼 Side

あの日は本当に酷い嵐だった。

僕は室内の窓からボーっと外を見ていたら、なにやら甲板が騒がしかった。

少し気になり甲板を覗いて見たら、いきなりの突風で僕の体は風に捕まった。

『ちよっ……あわわわわわ』

風に従い僕はどんどん進んで行く。  
すると前に部下達が居た。

『（マズイ、ぶつかる！）どいて！』

海兵達は突進してくる僕に驚き避けて行く。

……いや、確かに「どいて！」って言ったけど止めてほしいな。

誰か一人くらい助けるよ！！



そんな事考えてたら、僕の体は空を舞っていた。

下は海。

しかも、とつさに誰かの腕を掴んで巻き添えにしまったみたいだ。

やべーよ。絶対こいつ怒ってるよな……

「しよ、少将!?!」

『(やっぱり怒ってる!?!え、でも今は揉めてる場合じゃ……)しやべるな。(後で文句は聞くから、誰か助けるおおお!!!)』

空中でジタバタしていたら、僕はいつの間にか彼の腕を放し、僕だけが海の中へ……

……嘘だろー！ー！ー！！！！

海の中で、もがく僕は何かにしがみついた。  
なんだこの物体。

いや、この際なんでもいい！とにかく何かに掴まらなきゃ……

|| || || || || || || ||

『……………ん……………』

「おー気がついたな！」

『……………あ（誰だこいつ）……………』

翼 Side out

くオマケく

その頃、海軍本部では……………

「いいか、絶対に見つけて保護しろよ。」

「頼むよクザンく。もしツバサ君に何かあったら……………」

「燃やしてやるからな。マグマをなめるなよ氷小僧。」

「（ヤベー。このおじさん達怖い！本当にツバサ君どこおおおおお）

「



## 第五話 遭難（後書き）

次回はあの人達（海賊）に会います！

超有名な大海賊のある人達です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8326z/>

---

勘違い青年の海軍奮闘記

2011年12月29日12時45分発行